

フィンランドの音楽教育 II
—小学校音楽科教材に関する考察 2—

田 原 昌 子

はじめに

OECD 経済協力開発機構が実施している PISA 国際学力調査の結果で、「フィンランドは教育大国である。」ということを全世界に知らしめることになって以来、フィンランドの教育は、世界から関心を向けられようになった。筆者は、ピアノ音楽やピアノ教育の研究を通してフィンランドとの交流を持ち、2004 年からフィンランドの小学校音楽科教育の現場を中心に視察し、フィンランドの小学校音楽科教育には、次の3つの特色があることを「フィンランドの音楽教育 I」¹⁾において報告を行った。その特色とは、「幅広いジャンルの音楽を採り上げていること」、「リズム教育を重視していること」、「ヨーロッパやアメリカの様々な音楽教育法を導入していること」である。

続く「フィンランドの音楽教育 II—小学校音楽科教材に関する考察 1—」²⁾で、教育現場で多くの教師が良い教材の一つとして使用している小学校音楽科教科書を取り上げ、フィンランドと日本の小学校 1-2 学年の学習内容を比較し、その特色を明らかにした。その結果、フィンランドの小学校音楽科教育の特色が、2点明らかになった。1点目の「リズム教育を重視していること」は、日本の 1-2 学年の学習内容と共通する特色として、2点目の「和声や音の重なりのお響きを大切にすること」は、異なる特色として挙げられた。

フィンランドの学校教育は、National Board of Education（国家教育委員会）による『The National Core Curriculum for Basic Education』³⁾（以下ナショナル・コア・カリキュラムと記す）で、教育内容がある程度規定されている。このナショナル・コア・カリキュラムを基に、各地方自治体では、教育関係者のみならず一般市民の参入を受け入れ、独自のカリキュラムを編成している。さらに各学校では、学校の特色を取り入れ、各学年で教師たちが話し合い、各教師が創意工夫を加えるという柔軟性のあるカリキュラムの下、子どもたちへの指導がなされている。

また、教科書検定制度がないフィンランドでは、教科書は、教材集・曲集の一つとして扱われ、授業で必ず使用する必要はないが、現場の多くの教師たちは、子どもの心身や音楽的能力の発達、フィンランドの歴史や環境、文化を踏まえた良い教材であるという理由で、教科書を採択して授業を実践している。

本研究では、教育内容のガイドラインとなっているナショナル・コア・カリキュラムの基礎教育⁴⁾

の音楽科に関する記述⁵⁾について、その構成と内容について検討をする。特に小学校 1-4 学年に相当する部分の内容については、日本の『小学校学習指導要領』⁶⁾（以下学習指導要領と記す）との比較を行い、さらに、ナショナル・コア・カリキュラムの内容が、小学校 3-4 学年用の教科書の内容にいかん反映されているかについて検証し、フィンランドの音楽科教育の特色を探索する。

I. ナショナル・コア・カリキュラム音楽科の構成と内容

1-1 構成

2004 年に公示された現行のナショナル・コア・カリキュラムは、それまで指導の指標とされていたものに大きな改訂がなされた。それは、基礎教育のナショナル・コア・カリキュラムにおいて、すべての教科をまたがって設定された学習項目として挙げられる「クロス・カリキュラム」のテーマである。

＜ナショナル・コア・カリキュラム 「クロス・カリキュラム」のテーマ＞

- | |
|--|
| 1. 全人教育 (Growth as a person)
2. 文化的アイデンティティと国際性 (Cultural identity and internationalism)
3. メディア・スキルとコミュニケーション (Media skills and communication)
4. 市民としての参加意識と起業家精神 (Participatory citizenship and entrepreneurship)
5. 環境・福祉・持続可能な未来に対する責任 (Responsibility of the environment, well-being, and a sustainable future)
6. 安全と交通 (Safety and traffic)
7. 技術と個人 (Technology and the individual) |
|--|

このテーマは、上記のように 7 つの項目から成り立ち、すべての科目の学習に取り入れ、この内容を子どもたちが獲得できるように工夫をした指導を行うことが、現場の教師には求められる。

フィンランドの基礎教育における音楽科のナショナル・コア・カリキュラムは、9 年間の指導内容が、1-4 学年と 5-9 学年の二つに大別され、その構成は、「前文」⁷⁾、1-4 学年の「指導目標」「主たる指導内容」「4 学年終了時に達成が好ましい活動」と、5-9 学年の「指導目標」「主たる指導内容」「成績評価グレード 8 の最終評価基準」の項目から成り立っている。

ナショナル・コア・カリキュラムと学習指導要領の指導目標や指導内容の構成についてまとめ（表 1）、比較すると、次の 2 つの相違点が明らかになった。

表 1 指導目標・指導内容の構成

ナショナル・コア・カリキュラム	学習指導要領
小学校 1-4 学年と小学校 5 学年から中学校 3 学年の 5-9 学年を対象にし、基礎教育 9 年間で 2 つに大別して書かれている。	義務教育の 9 学年を小学校 1-2 学年、3-4 学年、5-6 学年、中学校 1 学年、2 学年及び 3 学年という 5 つのまとまりで書かれている。
指導目標、指導内容についての記述のあとに、到達目標、評価の基準が明記されている。	到達目標、評価の基準は、記述がされていないが、＜指導計画の作成と内容の取扱い＞という項目で、指導計画や内容の取り扱いについて記述がされている。

1 点目は、2004 年のナショナル・コア・カリキュラムの改訂で、それ以前にも挙げられていた 9

年間の基礎教育である小学校と中学校の一貫教育が、さらに徹底されるようになり、指導目標や指導内容が、1・4 学年と 5・9 学年の 2 分割で示されるようになった点である。これによって、小学校 5・6 年と中学校 3 年間の学習内容に連続性が生まれ、校種を超えた「クロス・カリキュラム」の教育が行われる可能性が大きくなったといえる。

2 点目は、学習指導要領にある＜指導計画の作成と内容の取扱い＞の項目は、ナショナル・コア・カリキュラムには記述がないという点である。フィンランドでは、具体的な指導計画や内容の取扱いについて現場の教師に任せるという柔軟性が保証されているため、この項目について示す必要がないと考えられる。

1－2 前文

前文では、「クロス・カリキュラム」のテーマにある 7 つの項目が、音楽指導を通して獲得されることを目標とし、基礎教育 9 年間の音楽指導の責務について書かれている。

＜ナショナル・コア・カリキュラム 音楽 前文＞

音楽指導の責務は、音楽領域から関心の対象をみつけること、音楽活動に関わることを促すこと、音楽を通して自己表現の手段を与えること、及び人間形成の一助となることである。さらに、音楽が時代と状況に密接に関連していることを理解できるように導くことである。音楽は、時代、文化・社会によって異なり、対象とする人によって異なる意味を持つ。自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏で、音楽を聴くことを通して有意義な経験を得ることが、音楽を理解し、概念化するベースとなることを勧奨し、指導しなければならない。音楽指導は、児童・生徒一人一人の音楽性 (musical identities) 形成の過程のなかでその目的は様々な音楽を鑑賞し、様々な音楽に好奇心を抱く姿勢であるが一開発するツールを提供する。音楽のスキル (技術) は、反復による、かつ長期的な練習により開発される。児童・生徒が共に音楽を、自分自身、あるいは小さなグループの中で奏でることは、責任感、建設的な批判をする姿勢、多様な文化やスキルを受容・理解するソーシャルスキルを開発する。音楽以外の指導科目との関連を探ることによって、児童・生徒の全人的な表現力の開発に当たらなければならない。音楽指導のなかで、テクノロジーやメディアが提供する可能性が有用化される。

これに対し、小学校『学習指導要領』と中学校『学習指導要領』⁸⁾の音楽科「教科の目標」(下記に示す)が、ナショナル・コア・カリキュラムの前文に相当するといえる。

＜小学校学習指導要領・中学校学習指導要領 音楽 教科の目標＞

小学校学習指導要領
表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。
中学校学習指導要領
表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

両国の音楽科の目標は、音楽を通しての人間形成を目指している点で共通している。しかしながら、前文には、日本の小学校・中学校の教科の目標に加え、平成 19 年 6 月に改正された『学校教育法』⁹⁾ 第 2 章第 21 条に規定されている、義務教育の目標の内容が付加されていると考えることができる。特に「自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。」「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄

与する態度を養うこと。」という 2 項目は、前文にある「児童・生徒が共に音楽を、自分自身、あるいは小さなグループで奏することは、責任感、建設的な批判をする姿勢」や、「多様な文化を受容・理解するソーシャルスキルを開発する」に相当するといえる。

フィンランドの音楽科教育は、音楽の領域から自分の関心の対象を発見し、音楽活動に関わり、音楽を通しての自己表現や人間形成の一助になることが音楽指導の果たすべき務めであると述べている。それに対し、日本の音楽科教育では、「表現」と「鑑賞」の二つの領域での経験を通して、音楽を愛する気持ちと感受性を育て、音楽的能力を養い、情感豊かな心を持った人間の形成を目標としている。すなわち、一人ひとりの関心や表現力を大切に目標に到達しようとするフィンランドと、情感豊かな心を求めて目標に到達しようとする日本と、音楽教育によって育成しようとする人間像の相違が現れているのではないだろうか。

1-3 小学校 1-4 学年の指導目標・指導内容

ナショナル・コア・カリキュラムの 1-4 学年までの指導の目標・主たる指導内容の全文は、以下に示している。

<ナショナル・コア・カリキュラム 音楽 小学校 1-4 学年 指導の目標・主たる指導内容>

<p><小学校第 1 学年～第 4 学年> 楽しく、総合的な音楽活動（integrating activity）を展開することにより、音楽表現力を開発することが中心となる。様々な音の世界と音楽を経験させ、自己表現を促し、自分自身の考えを具体化するように促す。</p> <p>指導の目標 ＊自分達の声を無理なく活用し、個人及び集団での歌唱、器楽演奏及び身体反応により、表現することを学ぶ。 ＊音環境と音楽を集中し、かつ、積極的に聴き、観察する（observe）ことを学ぶ。 ＊作曲の要素として、様々な音楽を形づくっている要素を使うことを学ぶ。 ＊音楽の世界の多様性を理解することを学ぶ。 ＊音楽を作るグループの一員として、音楽の聴き手として、責任を持って行動することを学ぶ。</p> <p>主たる指導内容 ＊児童の発達段階に応じた（age-appropriate）歌唱ゲーム：発話、言葉遊び（talking nonsense）、及び歌唱による練習 ＊歌唱曲：声部に分かれて歌唱できるような練習 ＊器楽演奏曲及びその練習：身体を使った楽器、リズム楽器、旋律楽器、及び和声的な楽器（harmonic instruments）及び、一緒に演奏できるようになるための準備をする。練習では、まず、基本的なリズム感を開発すること。 ＊一人ひとりが経験や発想を説明するなど、様々な活性化の手段を用いて、色々な音楽を聴くこと。 ＊音の反復、小規模な作曲（sound composition）及び即興による作曲活動。 ＊自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏で、聴く、身体反応する、及び作曲することに関連して、音楽を形づくっている要素—リズム、主旋律、和声、強弱、音色や形式—に関する基本的な概念。 ＊異なった時代や音楽のジャンルを網羅する、フィンランドの音楽及びその他の国々、文化の音楽を紹介する、歌唱、器楽による楽曲、聴く楽曲。</p>
--

<指導の目標>

学習指導要領の 1-2 学年、3-4 学年の目標にも書かれているように、この年齢の子どもたちの特性に合わせ、「楽しく、基礎的な表現の能力を育てるということ」が、両国の共通する指導目標として挙げられる。

ナショナル・コア・カリキュラムでは、指導の目標として、多様な音楽経験をし、自己表現や、自己の考えを具体化するように促すことが記述されている。歌唱・器楽・鑑賞の活動で子どもたちが何を学ぶか、また、作曲を通して音楽を構成する要素を実際に使うことや、音楽の世界の多様性

を学ぶことや、音楽を作る、あるいは聴く一員として行動することが目標として書かれ、学習指導要領に書かれている目標より、具体性のある目標となっている。

一方、学習指導要領では、表現や鑑賞の能力を育み、豊かな情操を養う態度と習慣を育てるという一般的な目標のみが書かれている。このことから、ナショナル・コア・カリキュラムには、教師が何を教えるかの指導の内容ではなく、記述されている目標に向かって子どもたちが何を学び取るかという目標が、より明確に示されている。

『フィンランドの理科教育 高度な学びと教員養成』で、鈴木誠は、教師が何を教えるかを「ティーチング」、子どもたちが何を学び取るかということを「ラーニング」という言葉で表している。さらに、フィンランドの教師たちが「子どもたちから引き出す」ラーニングの授業に取り組んでいることや、「ラーニングを柱に授業展開をするには、生徒の日ごろの学習内容や定着度、また、モチベーションなどのモニタリングを欠かすことはできない。」「ラーニングでは教師の力量がそのまま表れるのである。」¹⁰⁾と、同著の中で述べている。「ティーチング」と「ラーニング」の指導目標の相違は、両国の教育に対する根本的な考え方の相違といえるのではないだろうか。

＜主たる指導内容＞

両国の指導内容を、表現領域、鑑賞領域、共通する指導内容の3つの部分に分け、さらに表現領域は歌唱・器楽・作曲（音づくり）の3つの活動に分けてまとめ、表2に示した。

表2 1-4 学年の主たる指導内容の比較

ナショナル・コア・カリキュラム	学習指導要領
表現領域 歌唱	
発話や言葉遊びを含む歌唱ゲームを通じた歌唱指導や、声部に分かれて歌唱できる歌唱曲の指導。	範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりし、歌詞の内容や曲想を工夫して思いや意図を持って、自然で無理のない歌い方で、互いの声や伴奏を聴いて歌う指導。＊歌唱教材は、共通教材を含む、斉唱や簡単な合唱曲を取り扱う。
表現領域 器楽	
身体を使った楽器、リズム楽器、旋律楽器、和声的な楽器の演奏の指導と、器楽指導を通してリズム感を育成すること。	範奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりし、思い意図を持って、音色に気をつけて旋律楽器や打楽器を演奏し、互いの楽器の音を聴きながら音を合わせて演奏する指導。＊既習の歌唱教材を含めた簡単な重奏や合奏曲を取り扱う。
表現領域 作曲（音づくり）	
音の反復に着眼し、小規模な作曲や即興演奏による作曲活動の指導と、作曲を通してリズム、主旋律、和声、強弱、音色や形式に関する基礎的な意味内容の指導。	音の響きやその組み合わせを楽しみ、様々な発想で即興的に表現し、音づくりをする過程を大切にしながら音楽の仕組みを生かして、思いや意図を持って表現する指導。
鑑賞領域	
受け身で聴く鑑賞ではなく、一人ひとりが自分の経験や思いや考えを説明できるといった、積極的な姿勢で音楽を聴き、また、多種多様な文化の音楽や自国の音楽を聴くことや、聴く活動を通して、リズム、主旋律、和声、強弱、音色や形式に関する基礎的な意味内容の指導。	曲想とその変化を感じ取り、音楽を形づくっている要素や楽曲に気を付け、楽曲の特徴や演奏のよさに気が付くように指導。＊鑑賞教材にはわが国や諸外国の民謡、劇音楽や人々に親しまれている音楽などをとりあげる。音楽を形づくっている要素を感じ取りやすく、聴きやすい楽曲や、いろいろな演奏形態の楽曲を取り扱う。
2つの領域に共通する事項	
多種多様な文化の音楽や自国の音楽に親しみ、自分自身や小さなグループでの演奏や聴くこと、身体反応すること、作曲を通して、主旋律、和声、強弱、音色や形式といった音楽を形づくっている要素に関する基礎的な意味内容の指導。	音楽を形づくっている要素については、音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、音階や調、拍の流れやフレーズを、音楽の仕組みについては、反復、問いと答え、変化などを聞き取り、それらの働きが生み出す面白さや美しさを感じる指導。音符や休符や記号に関わる用語を、音楽活動を通して理解する指導。

両国に共通する指導内容は、表現領域の 3 つの活動を通して、自分の思いや意図をもって自分自身を音で表現し、音楽を形づくっている要素について感じ理解すること、表現活動において即興的な表現を挙げていることの 2 点である。

ナショナル・コア・カリキュラムの表現領域に関する項目で、次の 4 点が、学習指導要領に書かれている内容よりも、重視されている。その 4 点とは、音の響きやその組み合わせだけではなく和声に関する記述がある点、器楽演奏においてリズム感の開発を挙げている点、作曲（音づくり）において音楽の反復を扱っている点、自己の発想や経験を説明するという自己実現を意見として求める点である。また、鑑賞領域だけではなく、歌唱・器楽で、異なった文化や時代、ジャンルを網羅する楽曲を扱うことも、表現領域の指導内容の特色として挙げられる。

それに対し、学習指導要領では、特に 3・4 学年において歌唱・器楽でハ長調という特定の調性の楽曲を取り上げ、楽譜を読み、旋律を演奏することを、また、音づくりにおいては、音づくりをする過程を楽しむことが指導内容に書かれている。しかしながら、表現領域の最大の指導内容の相違点は、学習指導要領には、ナショナル・コア・カリキュラムにはない＜共通教材＞（表 2 中＊印）の記述がある点である。表現教材として扱う具体的な曲目が学年ごとに 4 曲ずつ列挙され、これらを教材として扱うこと、すなわち、何を教えるのか、「ティーチング」のための教材までもが明記されている点である。

以上のことより、ナショナル・コア・カリキュラムの指導内容においても「ラーニング」の柱になる内容、すなわち、先に挙げた 4 点は明確に示されているが、具体的な内容や教材選択は、力量のある教師が自由に選択できるという教師の教育の自由と、社会の教師への信頼が表れているといえるのではないだろうか。

1－4 4 学年終了時に達成が好ましい活動

4 学年終了時に、一人ひとりの子どもが音楽科教育で達成しておきたい活動目標、すなわち到達目標が、ナショナル・コア・カリキュラムには明記されている。

＜ナショナル・コア・カリキュラム 4 学年終了時に達成が好ましい活動＞

第 4 学年終了時に達成が好ましい活動

- *発声方法を理解し、声を合わせて歌唱できる。
- *楽曲の基本的なリズムをとることができ、器楽演奏に参加でき、一緒に演奏できる。
- *歌唱曲を習熟し、その一部を暗譜で歌うことができる楽曲がある。
- *個人として、集団の一員として、音、身体反応、リズムやもしくは旋律を使いながら、独自の音楽的な解決（musical solutions）一例えば、繰り返し（in echo）、問いと答え、ソロもしくはトゥッティ（一人で、もしくはみんな）での練習、一を発見できる。
- *耳から入ってくる音楽を認識し、音楽を聴いた経験を、言葉、イメージもしくは身体反応で表現できる。
- *自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏でるグループの一員として、他のメンバーのことを勘案しながら、どのように行動すべきかを理解している。

学習指導要領にはこの到達目標は示されておらず、＜指導計画の作成と内容の取扱い＞の項目で、どのような指導計画を立て、何を教えるかについて詳細に記述されている。

すなわち、ナショナル・コア・カリキュラムには、学習指導要領にある、教師が何をどのように取り扱って教えるかではなく、子どもたちが具体的な活動として何ができるようになったかという、「ラーニング」の成果を問う評価の要点が示されている。これは、到達目標に向けた具体的な指導計画、教材の取捨選択あるいは作成、そして指導の実践を、現場の各教師の裁量に委ねるというフィンランドの教育の根幹を表している。

＜指導計画の作成や内容の取扱い＞は、教師一人ひとりのカリキュラム開発能力や指導力に委ねられるということは、言い換えれば、フィンランドでは、教育の計画、実行、評価、促進を行うことができる質の高い教師が求められるのである。教師育成に力を注ぎ、社会全体が教育に強い関心を持つフィンランドであるがゆえに、教育立国として世界から関心を集められる存在になったといえよう。

II. フィンランドの小学校 3-4 学年音楽科教科書

ナショナル・コア・カリキュラムで、行政的な面から小学校 1-4 学年の音楽科の目標・内容を検討したが、教育現場で良い教材として用いられる機会の多い音楽科教科書の内容は、いかなるものであろうか。先行研究で分析を行った『MUSIIKIN mestarit 1-2』OTAVA 社 (2008) に続き、本研究では『MUSIIKIN mestarit 3-4』OTAVA 社 (2009) を取り上げ、その内容の分析から、その特色を探り、ナショナル・コア・カリキュラムとの対応を検証する。

2-1 『MUSIIKIN mestarit 3-4』の目次と構成

『MUSIIKIN mestarit 3-4』は、288 ページで構成されている。目次には、Ruber ルーベルというアザラシに出会った動物たちが、7 人の子どもたちの姿に変身し、世界で一番美しい音楽を求めて旅行をするという内容が、単元名として掲載されている。さらに各単元には、学習する内容や、取り上げられている曲について推測できる小単元や見出しが書かれている。

単元 1、4、8 は、それぞれの単元名、小単元、見出しにちなんだ曲が集められた「曲集」になっている。単元 9 の「Musiikin aarteita 音楽の宝物」の項目には、全編で扱われている楽典のまとめ、楽器の奏法、コードネームに対応させた各楽器のコードの押さえ方が、一覧表として掲載されている。

2-2 各単元の内容

『MUSIIKIN mestarit 3-4』の各単元には、音楽科教科書に読み物としての＜物語＞が書かれている。各単元の本文の学習内容に関する表記については翻訳し、それを表 4 から表 9 にまとめ、図 1 から図 3 を参考図として文末に添付した。

『MUSIIKIN mestarit 3-4』の9つの単元を、掲載されている楽曲と本文の学習内容に関する表記から、先行研究の『MUSIIKIN mestarit 1-2』の方法と同様に、歌唱・器楽・作曲（音づくり）という表現領域の項目と、音色・リズム・速度・旋律・強弱・音の重なり・音階や調・拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴づけている要素の項目を中心に整理し、以下のようにまとめた。なお、各単元名、小単元名、見出しの順に訳文を付記した。

単元 1 < Norppa ja tähtitaivas ワモンアザラシと星空 >

: 夏の思い出－音楽の冒険が始まる ワモンアザラシと自然の中の音楽

歌唱	その他（物語）
自然や動物に関する内容の曲が取り上げられている。	教科書を通して展開される物語の導入部分。ワモンアザラシと星からやってきた友だちの動物たちが人間の子もたちに姿を変えて旅行に出かけるまでのお話しが、フィンランドの自然を背景に書かれている。

単元 2 < Viridis ja vaelluskengät ヴィルディス(トカゲ)とトレッキングシューズ > 文末資料 表 4

: 動物の友だち－秋と冬の歌 リコーダー学校でのヴィルディス

歌唱	器楽	音の重なり
秋から冬の自然や、動物に関する曲が多く取り上げられている。	柳の節で笛を作ることからリコーダーの学習へと導入され、リコーダーを吹く姿勢、タンギング、c1～c2までの音のリコーダーの穴の押さえ方、ロングトーンやスキップリズムによるタンギング練習が取り入れられている。	リコーダーによる3重奏で、音の重なりや和音の響きを感じる。

単元 3 < Viola ja vanha ruuhi ヴィオラ（クマ）と古い平底の漕ぎ船 >

文末資料 表 5

: 民族音楽－フィンランドの歌や伝統 カンテレ学校でのヴィオラ

歌唱	器楽	音の重なり	調性
フィンランドの民謡や伝承曲、フィンランド叙事詩 カレワラに関連のある曲を、カンテレでⅠ・Ⅳ・Ⅴの和音伴奏をしながら歌う弾き歌いの曲が採り上げられている。また、サークルになって古いフィンランド語が入った歌を歌いながら踊る曲や、2組に分かれてメンバーのやりとりをする踊り（花いちもんめのような踊り）の曲が取り上げられている。	カンテレによるⅠ・Ⅳ・Ⅴの和音の奏法の解説がされている。	カンテレによる長調のⅠ・Ⅳ・Ⅴの和音伴奏で和音の響きや、短調のⅠ・Ⅴの和音伴奏で、長調・短調の響きの違いを感じることのできる曲が取り上げられている。	カンテレで二長調、二短調のⅠとⅤの和音を調弦で容易に作りだせることから、長調と短調の曲が取り上げられている。

単元 4 < Keruleos ja kuumailmapallo ケルレオス（ワシ）と熱気球 >

: フィンランドの近隣の国々－ヨーロッパの音楽 ケルレオスのヨーロッパ研究旅行

歌唱
フィンランドの近隣のヨーロッパ諸国の曲が取り上げられている。

単元 5 < Aurora ja teatterilaiva アウロラ（ドラゴン）と演劇の船 >

文末資料 表 6

: 映画から、ミュージカルから、おとぎ話からの音楽 歌の学校でのアウロラ

歌唱	音程
声を出すための姿勢・準備、呼吸の仕方、発声方法、正しいフィンランド語の R / S / P の入った言葉による発音練習で、無理のない自然な歌い方が示されている。また、演劇の中での歌唱や、ディズニーの映画曲、有名なミュージカル曲が取り上げられている。	ハンドサインで do から ti の音の高さを目と手で表し、その1オクターブの音域内で大きな音程の跳躍がない歌曲が取り上げられている。

単元6 < Flavia ja retkipyörä フラヴィア (オオヤマネコ) と自転車 > 文末資料 表7 図1

: 遊びながら、ダンスをしながらの音楽エクササイズ フラヴィアと身体リズム

歌唱	拍・リズム
交通安全の歌、キャンプファイヤーの歌、カナダのインディアンやアフリカの国々の歌唱曲が取り上げられている。歌詞の内容を身体で表したり、リズム打ちや踊りながら歌う曲、言葉遊びのラップ音楽が取り上げられている。	膝打ち+手拍子や、スティックでリズムを取りながら歌う、歌詞の内容を手や身体を用いて表現しながら歌う、曲に合わせてフィンガースナップ・手拍子・胸打ち・前腿打ち・腿の横打ち・足踏みなど、身体でリズムをとったり、さらにはステップを左右にとったり、ジャンプをしたりしながら歌い、拍やリズムを身体表現する曲が取り上げられている。

単元7 < Ater ja keikkabussi アテル (カニ) と公演のためのバス > 文末資料 表8 図2・図3

: リズム、管、四角い板の形の楽器ードラムーギターーベースー鍵盤楽器 演奏家としてのアテル

器楽	リズム	強弱	音の重なり	音階
木琴・鉄琴・ドレミパイプを和音の構成音や5音階を演奏する楽器として、ドラムやジャンベ・ボンゴをリズム楽器として、ギターや鍵盤楽器を和音伴奏楽器として、ベースを和音の根音を担当する楽器として捉え、その奏法が示されている。	ドラムセットや、ジャンベ、ボンゴといった打楽器、または、それに代わる身近な楽器でいろいろなビート打ちやリズムを演奏する。	強弱記号・音符・休符・拍子記号・速度記号・ト音記号・ヘ音記号・臨時記号の一覧が、絵を用いてその意味が表されている。	板やドレミパイプを片手で交互に、あるいは同時に演奏することによって、D, A, C, A m, A, G, のコードの主音と第5音を感じたり、ギターでD, Em, 簡単なC, 簡単なG7, のコードを、ベースでコードの根音を、鍵盤楽器でC, G, F, Dm, D, のコードを、とりあげ、和音伴奏を通して音の重なりが取り上げられている。	cde ga の5音階の音を用いて、木琴や鉄琴、ドレミパイプを片手で交互に、あるいは同時に即興演奏をする。

単元8 < Indigo ja ilotulitus インディゴ (白鳥) と花火 >

: お祝いの歌ー友だちや家族 インディゴと1年のお祭り

歌唱
誕生日や独立記念日、キリスト教に関連した様々な行事や記念日の歌が取り上げられている。また、季節やフィンランドに関わりのある歌が取り上げられ、歌詞とコードネームだけが書かれた歌唱譜も多く取り上げられている。

単元9 < Ruber ja tähtien lapset ルーベル (アザラシ) と星の子どもたち > 文末資料 表9

: カノンから合唱曲へー春の歌 音楽の宝物 索引

歌唱	器楽	音楽を特徴づけている要素
カノン (輪唱)、合唱が取り上げられている。「きらきら星」の歌詞が5か国語で書かれている。	リコーダー、リズム楽器、ギター、ベース、キーボードのそれぞれの奏法、和音の押え方がまとめられている。	音楽理論のまとめとして音符と休符、五線譜、リズム譜とリズムの名前、小節の中のリズム唱、基本音階、変化記号、半音階、調性と調子記号、音楽の音程、3和音、音程、指の音階、音楽の形式、テンポ、強弱法が、文章と絵を用いて解説されている。

2-3 フィンランドの小学校 3-4 学年音楽科教科書の特徴

各単元で取り扱う内容と、本稿の1-3で示したナショナル・コア・カリキュラム<主たる指導内容>との対応を表3にまとめ、次のページに示した。

その結果、子どもたちがどのような手段を用いて色々な音楽を聴くかについての記述以外、すべての指導内容に関する事項が、まんべんなく『MUSIIKIN mestarit 3-4』の教科書で扱われていることがわかる。それゆえに、『MUSIIKIN mestarit 3-4』の教科書を良い教材の一つとして、教師たちが授業で適していると考える楽曲や内容をその中から取捨選択して使用していることに納得できる。

表 3 <ナショナル・コア・カリキュラム主たる指導内容と『MUSIIKIN mestarit 3-4』の内容の対応>

ナショナル・コア・カリキュラム主たる指導内容	『MUSIIKIN mestarit 3-4』の内容
* 児童の発達段階に応じた (age-appropriate) 歌唱ゲーム：発話、言葉遊び (talking nonsense)、及び歌唱による練習	・ フィンランド語の発音に関する歌、おしゃべり歌、言葉遊びのラップの音楽が取り入れられている。 ・ 踊りや、歌詞の内容を身体表現しながら歌う曲が取り上げられている。
* 歌唱曲：声部に分かれて歌唱できるような練習	・ カノンや合唱の曲が取り入れられている。 ・ 無理のない自然な発声方法や、ハンドサインを導入して正しい音程の取り方についての記述があり、合唱の準備がされている。
* 器楽演奏曲及びその練習：身体を使った楽器、リズム楽器、旋律楽器、及び和声的な楽器 (harmonic instruments) 及び、一緒に演奏できるようにするための準備をする。練習では、まず、基本的なリズム感を開発すること。	・ リコーダーの奏法や旋律楽器としての曲、鉄琴や木琴、ドレミパイプの奏法、ドラム・ジャンベ・ボンゴのリズムの楽器の奏法とリズム練習、ギター・ベース・鍵盤楽器のコードの奏法、が取り上げられている。 ・ フィンガースナップ、手を打つ、胸を打つ、腿の前を叩く、腿の横を叩くという身体でリズムを取って歌うことから導入し、それをドラムやジャンベ、ボンゴなどのリズム楽器の演奏に発展させている。
* 一人ひとりが経験や発想を説明するなど、様々な活性化の手段を用いて、色々な音楽を聴くこと。	教科書内にこの項目に関する記述はみられない。
* 音の反復、小規模な作曲 (sound composition) 及び即興による作曲活動。	・ 歌曲に合わせて、木琴やドレミパイプで、単音、または 2 つの音を交互にあるいは同時に演奏することを繰り返し、自分のメロディや即興演奏を考える指示がされている。
* 自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏で、聴く、身体反応する、及び作曲することに関連して、音楽を形づくっている要素—リズム、主旋律、和声、強弱、音色や形式—に関する基本的な概念。	・ カンテレ、ギターやベース、鍵盤楽器で、歌曲の和音伴奏としての和声や音色に耳を傾ける演奏、ドラムやジャンベ、ボンゴといったリズム楽器や身体をリズム楽器として使った演奏、リコーダーによる旋律演奏など、自分自身で、また、グループで演奏する内容の曲が取り上げられている。 ・ 強弱やテンポ、拍子や音符・休符といった楽典が、絵を用いて解説され、音楽を形づくっている要素の基本的な理解が取り上げられている。
* 異なった時代や音楽のジャンルを網羅する、フィンランドの音楽及びその他の国々、文化の音楽を紹介する、歌唱、器楽による楽曲、聴く楽曲。	・ 取り上げられている曲は、自然や動物に関する曲、フィンランドの民謡やカレワラに関連のある曲、近隣のヨーロッパ諸国やカナダ、やアフリカの曲、ミュージカルやディズニーの映画曲、ロックミュージック、行事に関わる曲、交通安全の歌、さらに言葉遊びとしてのラップ音楽があり、幅広いジャンルの曲が取り上げられている。

また、『MUSIIKIN mestarit 3-4』の内容から、以下の 4 つの特色がまとめられる。

1) 他教科との強い関連をもっていること

あざらしと、それぞれに人間の名前を持つ 7 つの動物たちが子どもたちに姿を変え、世界で一番美しい音楽を求めて旅行をするという<物語>が全単元を通して書かれ、音楽の教科書としてだけでなく読み物としての要素が強く、国語科との関連が非常に大きい。これは、すべての教科の基礎的な教育として「読解力の育成」を掲げた「ルク スオミ プロジェクト」¹¹⁾が、2001 年から 2004 年まで国策として実施され、その理念が、音楽科の教科書の中でも継続して取り入れられているからといえる。

また、天候や自然や動物に関する楽曲が多く取り入れられ、環境に関する内容として理科との関連、世界の国々の音楽や自国の伝統に関する音楽や民謡は、社会科との関連がみられ、教科をまたがった内容が取り上げられている。さらに交通安全に関する曲も取り上げられ、これらは、「クロス・カリキュラム」のテーマが活かされた内容となっている。

2) 多様な文化を受け入れていること

取り上げられている楽曲のジャンルが、世界の様々な地域の音楽であるだけでなく、若者の間で人気のあるラップ音楽やロックミュージック、民謡や伝統曲がある。また、扱われている楽器についても、カンテレ¹²⁾、ドラム、エレキギター・ベースなどがあり、世界や時代に目を向けるだけで

なく、現代を生きる人々が興味や関心を持つあらゆる音楽が取り入れられている。

さらに音楽教育法においても、ハンガリーのコダーイによるハンド・サイン¹³⁾で音の高さを示す方法を取り入れ、音板楽器の一つとしてアメリカのブームワッカー(ドレミパイプ)やオルフ楽器¹⁴⁾を導入し、世界の様々な方法を取り入れている。このように、ナショナル・コア・カリキュラムの指導の目標や、指導の内容に挙げられている「音楽の世界の多様性」は、楽曲のみならず音楽教育法にもみられる。

3) 音の重なりや響きを大切にしていること

民族楽器のカンテレに加え、木琴・鉄琴・オルフ楽器といった音板楽器、エレクトリックギターやベース、アコースティックギター、ピアノなどが、和音、または和音の根音を演奏するための楽器として取り上げられ、その奏法が紹介されている。これらの楽器を、この奏法で扱う場合、旋律を演奏する楽器として扱う場合より、一人ひとりの子どもたちの読譜力の差に関与する部分は小さいと考えられる。

子どもたちの音楽的な能力が演奏や音楽への興味の妨げにならないような楽器、その奏法の工夫で和音を生み出す器楽演奏、合唱曲やカノンの曲、長調だけでなく短調の曲、といったことを取り上げる学習は、音の響きや和音を感じる学びに大きく貢献するものと考えられる。

4) リズムの学習を重視していること

言葉に強弱をつけて韻を踏むラップ音楽を用い、教科書で言葉遊びとしてリズムに乗って歌う曲が取り上げられている。撥音や拗音や破裂音の多いフィンランド語は、単語の発音がリズムカルであり、フィンランド語を流暢に話すための練習としても、リズムを大切にすることが重視されているのであろう。

ジャンベやボンゴに加え、ドラムセットの楽器を演奏する練習、身体を使ったリズム練習、さらに現代の若者が興味を示すロックなどのポピュラー音楽を取り入れは、子どもたちが音楽に関心を持ち、音楽活動に関われるように導くリズム学習が重視されていると考えられる。

おわりに

本研究で取り組んだナショナル・コア・カリキュラムと小学校3-4学年教科書の分析から、音楽科教育のみにとどまらない広義のフィンランドの教育の特色、「他教科との関連を持つ学び」と「教員としての高い資質の要求」の2点を見出した。

フィンランドでは、少しの気温変化が日々の生活に大きな影響を与え、長く厳しい冬を生き抜くことが必要であるため、環境に対する意識は「生きる」ために必要不可欠である。また、隣国と地続きであるというフィンランドの地理的・社会的な状況は、いやがうえにも、国民に国際理解の姿勢を必要とさせることになる。そのためには自国の歴史や文化、老若男女の興味や関心を理解する

ことが必要となり、音楽科における「幅広いジャンルの音楽を採り上げる」という指導目標や内容は、クロス・カリキュラムに基づく「他教科との関連を持つ学び」を具現化したものといえる。音楽教育が単なる音楽科としてではなく、環境や色々な文化に繋がりをもち、全人教育の一つの役目を担う教育であることは、疑う余地がない。

ナショナル・コア・カリキュラムのガイドラインをもとに、実践の具体的なカリキュラムの作成は、一人ひとりの現場の教師の裁量に任せられる。教師は、子どもたちの人間性や社会の一員としての成長に関わり、教材や指導法に創意工夫をした日々の授業実践を通して、子どもたちを生活に必要な知識や技術の習得に向けて導く責務を負っている。その考えの根源には、フィンランド社会の「教師への信頼」がある。それゆえに、教師には、子どもたちに何を教えるかではなく、子どもたちが何を学ぶかを追求する教育ができる「教師としての高い資質」が要求されるのである。

この特色に加え、フィンランドの音楽教育に関する先行研究で明らかになった「幅広いジャンルの音楽を採り上げていること」「ヨーロッパやアメリカの様々な音楽教育法を導入していること」「リズム教育を重視していること」「和声や音の重なり of 響きを大切にしていること」という具体的な特色の4点が、本研究でも再確認された。

引き続き、フィンランドのナショナル・コア・カリキュラムと小学校音楽科教科書の内容分析を通して、フィンランドの小学校音楽科教育の特色を検証し、日本の小学校音楽科教育において、フィンランドから学ぶことは何かを探究していきたい。

謝辞 『The National Core Curriculum for Basic Education』(2004)、『MUSIIKIN mestarit』のフィンランド語表記の翻訳に関し、北海道大学外国語教育センター非常勤講師水本秀明先生のご指導をいただきましたことを、感謝申し上げます。

<注>

- 1) 『フィンランドの音楽教育 Iー日本フィンランド学校での指導とフィンランドの小学校音楽科授業視察を事例としてー』田原昌子 プール学院大学研究紀要 第49号 2009
- 2) 『フィンランドの音楽教育 IIー小学校音楽科教材に関する考察 1ー』田原昌子 プール学院大学研究紀要 第51号 2011
- 3) 『The National Core Curriculum for Basic Education』Part IV: Chapter 7.15 Music
- 4) 初等教育（小学校）と中等教育（中学校）の9年間の基礎教育は、義務教育となっている。
- 5) 『The National Core Curriculum for Basic Education』Part II : Chapter 77 - 1
- 6) 『小学校学習指導要領 第2章 第6節 音楽』文部科学省 2008
- 7) 前文という言葉は、ナショナル・コア・カリキュラムの原文には使用されていないが、項目を分けるに当たり、前書きにあたる部分を<前文>という言葉を用いる。

- 8) 『中学校学習指導要領 第2章 第5節 音楽』文部科学省 2008
- 9) 1947年に公布された学校教育に関する総合的な法律。現行のものは2007年に改正された。
- 10) 『未来への学力と日本の教育 フィンランドに学ぶ教育と学力』pp18-19
- 11) 2001年から2004年まで読解力をつけるためにフィンランド政府が国策としてとった読解力育成のプログラム。
- 12) フィンランドの民族楽器で、指で弦をはじいて鳴らす撥弦楽器。
- 13) ゴルタン・コダーイ（1882-1967）ハンガリーの作曲家・民族音楽学者 特に歌唱活動を中心に音楽的な基礎力の養成に努めた。その一つの方法としてドレミファソラシドの音をハンドサインを使って表わした。
- 14) カール・オルフ（1895 - 1982）はドイツの作曲家・音楽教育家で、子どもたちが容易に音楽に参加できるように彼が発案した音板が取り外しできる木琴や鉄琴をオルフ楽器という。

【参考文献】

- ・ Liisa Kaisto, Sari Muhonen, Salla Peltola 著『MUSIIKIN mestarit 1-2』OTAVA 社 2008
- ・ Juha Haapaniemi, Elina Kivelä, Mika Mali, Virve Romppanen 著『MUSIIKIN mestarit 3- 4』OTAVA 社 2009
- ・ The Finnish National Board of Education『The National Core Curriculum for Basic Education』2004
- ・ 福田誠治『こうすれば日本も学力日本一 フィンランドから本物の教育を考える』朝日新聞出版 2011
- ・ 波田野 亘著『フィンランド語日本語 辞典』2010
- ・ 佐藤 学・澤野由紀子・北村友人編著『未来への学力と日本の教育 揺れる世界の学力マップ』明石書店 2010
- ・ 福田誠治『フィンランドは教師の育て方がすごい』亜紀書房 2009
- ・ R. ヤック-シーヴォネン H. ニエミ『フィンランドの先生 学力世界一のひみつ』桜井書店 2008
- ・ 鈴木 誠 他5名『フィンランドの理科教育 高度な学びと教員養成』明石書店 2008
- ・ 庄井義信 中嶋 博『未来への学力と日本の教育 フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店 2005
- ・ 小原光一 他12名著『小学生のおんがく3』『小学生の音楽4』教育芸術社 2010
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 2008
- ・ 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 2008

文末資料

<『MUSIIKIN mestarit 3・4』 本文の学習内容に関する表記>

表 4 単元 2

柳の笛のつくり方
 1 柳の枝から小さな節を折りなさい。柳の枝は春に一番よく外れる。
 2 最初に口の部分を刻みなさい。刻み目から空気が出るような刻み目を刻みなさい。
 3 枝の周りに2つの切れ目をナイフでくりと回して入れなさい。薄い皮のひもを外しなさい。
 4 ナイフの背で皮の周りを注意深くトントと叩きなさい。
 5 注意深く回して、ゆっくりと皮を剥ぎなさい。
 6 吹く管を刻みなさい。
 7 笛の部分の皮を、注意深くもとにあった場所に差し込んで戻しなさい。
 8 調整したり、試したりして仕上げなさい。

リコーダー学校でのヴィルデイス
 リコーダーを軽(軽)で支えなさい！
 軽(さ)やきなさい！ 笛に対して「デュー」と軽(軽)吹きなさい。
 良い姿勢を覚えなさい！ 背筋を伸ばして、両肩はくつろいで！
 吹くことを練習しなさい。デュー・デュー・デュー・デュー タンギングの練習)
 左手で始めなさい！・h 1・Hakkaa ロウノドリ)
 右手でリコーダーを支えなさい！・al・Alpha (さる)
 指が穴を完全に覆っているか確認しなさい！・g1・Gorile (ゴリラ)
 軽(軽)吹きなさい、そうすれば美しい音色を得られる。

表 5 単元 3

カンテラ学校のヴァイオリン
 I の和音…左手の人差し指と中指を、4弦と2弦に置きなさい。
 V の和音…左手の人差し指と中指を、3弦と2弦に置きなさい。
 IV の和音…左手の人差し指と中指を、5弦と3弦に置きなさい。

表 6 単元 5

歌の学校でのアウローラ
 ・小さなスタートのウォーミングアップから始める。
 ・両肩がリラックスした状態であることが重要である。少し足を開いた状態で立ちなさい。
 ・座っている時に、背中をまっすぐな状態で保ち、足の裏は床にしっかりとつけなさい。
 ・手をおなかの上に置きなさい。静かに息を吐いたり吸ったりしなさい。息をする時に、横隔膜の動きに注意しなさい。犬のように吠えてみなさい。ワフワフワフワフ…もちろん、歌うためには、身体全体が必要である。
 ・舌、唇、顎のウォーミングアップをしなさい。たとえば、あくびをすることによって、唇を震わせることによって、言葉遊びを繰り返すことによって。少しずつテンポを速めなさい。

早口言葉でR/S/Pの練習
声を開くこと
 ・山脈の線路を上下に滑りながら進みなさい。あなたの声を頭の4ほみの上の方で響かせるように試みなさい。空気があなたの声帯からもれないように、声がとぎれないように注意しなさい。
 ・声を開く練習を、異なった音の高さから歌いなさい。

おしゃべり歌
 ・素早く異なった音の高さから歌いなさい。

表 7 単元 6

* 図 1

身体が響く！
 フィンガースナップ・手・胸
 腿の前・腿の横・ステップ
顔からラップへ…



* 図 1 『MUSIIKIN mestarit 3・4』 P 168 より引用

「身体が響く！」様子を表している図

表 8 単元 7

四角い楽器 (休琴や鉄琴) とパイプ板やパイプ (ドレミパイプ) の演奏方法
 片手で交互にあるいは同時に自分のメロディを考えなさい
 即興で弾きなさい。自分のブルースのソロを考えなさい。

ドラム
 ・ドラムセットや机のドラムを使って

手で打つ太鼓
 ・ジャンベやバケツを使って
 ・太鼓の面の端を打つことを PA」、真ん中を打つことを BUM」

ボンゴや太ももに挟む太鼓類

ギター
 ・左手の指で和音を押さへなさい。
 ・数字は指を示し、その指で弦を押さえる。ダウンストロークやアップストロークを使って右手で伴奏しなさい。

ベース
 ・弦は右手の人差し指及び中指ではじかれる。親指はベースに固定する。
 ・左手の指で、弦は押さえられたり音を消されたりする。
 ・エレキベースはアンプを必要とする。

鍵盤楽器
 ・左手で和音の根音を弾きなさい。
 ・右手は和音を弾きなさい。
 ・同時に、または手を変えて伴奏しなさい。

* 図 2



* 図 3



* 図 2 『MUSIIKIN mestarit 3・4』 P 194 より引用

ドラムセットの名称紹介図

* 図 3 『MUSIIKIN mestarit 3・4』 P200 より引用

バスを担当するエレクトリックギターの名称紹介図

表 9 単元 9

音楽の宝物	指の音階
・音符と休符	・音楽の形式
・5線譜	・テンポ
・リズム譜とリズムの名前	・強弱法
・小節内のリズム唱	・リコーダーの運指
・異なったオクターヴの中の基本音階	・リズム楽器のためのオスティナート
・変化記号	・リズム練習
・半音階	・打楽器の伴奏
・調性と調子記号	・ギターのコード
・音階	・ベースの単音
・3和音	・キーボードの和音
・音程	
音楽用語集	
索引	

(ABSTRACT)

Music Education in Finland II: Study of the Music Curriculum for Primary School Education 2

TAHARA Masako

In order to clarify the characteristics of Finnish music education, this study analyses the contents of basic music education in the National Core Curriculum, and compares of the contents of the Government Course Guidelines for 1st to 4th grade elementary schools of Japan. The study also examines how the contents of the National Core Curriculum reflects the 3rd and 4th grade text book.

Analysis of the National Core Curriculum shows, not only the features of music education, but also two characteristics of Finnish education: “learning by correlation between different subjects” and “requirements for high quality teaching” . The basis of Finnish education focuses on learning outcomes instead of the substance of teaching, and it has become clear that the Finnish education stands on the strength of its high quality teaching.

From the analysis of the text book in the previous study, this study has reconfirmed that there are four specific characteristics of Finnish music education: “innovate a wider genre of music” , “introduce various European and American music education methods” , “emphasize the study of rhythm” , and “focus on harmony and the blending of sounds.”